

研究ノート

『高田大明神縁起』の故地を訪ねて

阿部 美香

一、隠岐高田大明神と『高田大明神縁起』

南北朝時代、島根県隠岐郡島後（現隠岐の島町）都万つしまの地に、新たな神が出現した。その名を高田大明神（現高田神社）という。神は、高田山の山頂にあるという成沢池から、「花の乳母」なる巫女によって麓に抱き降ろされ、本地仏を大日と弥陀と明かして、天健あまのけん金草神社の別当であった真言寺院千光寺と時衆道場の両者により奉斎された。その神威の発現は時衆のネットワークを通してたちどころに京都に伝えられ、金蓮寺五代浄阿上人を介して、関白二条良基を筆頭に公家や武家、時衆僧などが集い、百首和歌、千句連歌の勸進奉納が行われた。もとより、都万は北方を鎮護する神として天健金草神社が鎮座し、鎮守十六所や北野天満宮など有力な諸社が祀られる宗教的にも重要な要衝であった。花の乳母は、鎌倉時代の隠岐国最後の守護佐々木清高の弟清頭（清）の孫頼清の息女小花であり、新たな神の出現は、佐々木氏の政治や祭祀との深い関わりと、中央との密接な文化交流を背景に起こった。

中世における高田大明神の祭祀を研究する上で重要な資料として、『高田大明神縁起』がある。至徳四年（一三八七）の百首和歌、千句連歌の勸進奉納からまもないころに成立したと考えられており、高田神社には表紙の色から紺（青）表紙本、丹（赤）表紙本と通称される二種の伝本がある。これらの縁起は、昭和三三年に関西大学・島根大学隠岐総合調査団によってはじめて本格的な調査が行われ、『隠岐』に吉永登・神堀忍の翻刻紹介がある。⁽²⁾ 神堀は、錯簡を正し本来の形に復元して本文を紹介し、二種の縁起のうち紺表紙本に古態を見出した。その上で、縁起成立の背景を都万をめぐる政治力学と宗教勢力の活動の所産ととらえた。しかしながら、吉永が付記において注意を喚起したように、神堀は政治的事情を重視するあまり、縁起が語ろうとした歴史的、宗教的な意義を汲み取ることなくその価値を評価してしまった。その後、二種の縁起は、時衆文芸の地方展開の一つとして紹介されたり、至徳百首和歌研究の中で傍証として用いられることはあっても、かつて明神を祀りあらわした人々が縁起に託したメッセージは、歴史の中に埋没したままになっている。

新たに筆者は、明神を祀った花の乳母の存在に着目して『高田大明神縁起』の祭祀をとらえ直すことを試みた結果、百首和歌、千句連歌という記念碑的な文芸作品の奉納を頂点として豊かな祭祀の営みが語られていることが明らかになった。その成果の一端を、「巫女と仏教」と題して発表した^③が、なお『高田大明神縁起』の研究は中世の宗教文化の特質を考える上で、新たな視点を開くものと考ええる。

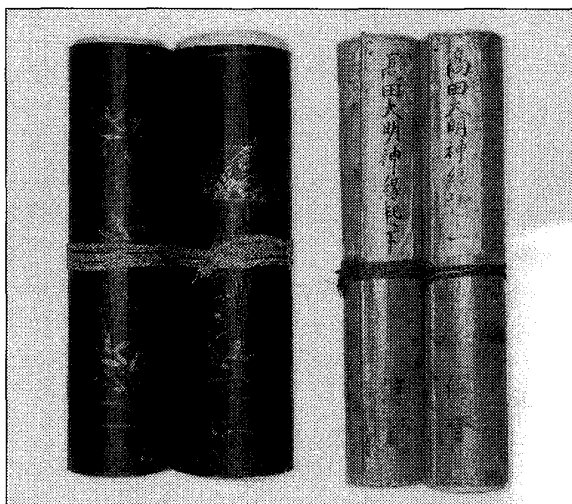
このたび、その故地を訪ね縁起の原本を披見する機会を得た。その結果、書誌事項を含め、縁起の成立や伝来に関わる裏書の存在など新たな発見もあったため、ここに調査報告を行い、若干の考察を施して、本縁起の基礎的研究の第一歩としたい。

二、縁起の現状と書誌について

二種の『高田大明神縁起』について、現状報告から始めたい。現在、高田神社では、両縁起は黒漆塗で被蓋^{カクセ}および脚付の縁起箱に一括して収められ、神殿の内陣下に安置されて篤く祀られている。それは御神体に等しい信仰の対象であり、容易に披見が叶うものではない。そのためいづれも料紙が糊離れを起こして錯簡が生じているものの、原装に近い状態のまま書写当時の姿をまことに良く伝えている。以下に書誌について簡潔に示しておく。

〔紺表紙本〕

上下二巻。表紙は後補である。紺紙に金泥で草花文様が施されていることから、紺（青）表紙本と呼ばれる。見返しは銀箔が散らされている。外題無し。元は題簽があった痕跡がある。内題は「敬白高田大明神御縁起上」「高田大明神御縁起下」、尾題は「高田大明神縁起上（下）」。紙高は上巻が二九・六糎、下巻が二九・一糎。界線は無い。上下巻ともに、冒頭は傷みやすいため上巻の第一紙と第二紙、下巻の第一紙目が、慶長の頃に新しく書写し直されている。その外は尾題に至るまで一筆で書写され、奥書識語はないものの、料紙や筆跡から室町中期から後期に遡る写本と推定される。錯簡を残したまま修理が施され、かつ糊離れを起こしているが、一紙も失われてはいない。紙数は、神堀の翻刻に基づいて復元した状態で、上巻は四〇紙（総長約一、五六九糎）、下巻は二九紙（総長約一、二七七糎）である。



〔図版①〕
紺表紙本（左）と丹表紙本（右）

〔丹表紙本（信譽本）〕

上下二巻。表紙は丹朱色で金銀箔が散らされていることから、丹（赤）表紙本と通称される。見返しは金地。表紙に金地の題簽があり「高田大神縁起上（下）」と墨書され、その下に「信譽」と識語がある。内題は「高田大神縁起上」「高田大神縁起之下」、尾題は「高田大神縁起巻上（下）」。また、下巻には本紙端裏に外題および識語があり、「高田縁起下 沙門信譽」（信譽自筆か）とある。紙高は上巻が三一・八糎、下巻が三一・五糎。本紙には天地に押界があり、界高は二七・七糎。糊離れしているが原装を伝え、表紙を含め一紙も失われてはいない。紙数は、上巻三〇紙（約一、二五四糎）、下巻三二紙（約一、三六〇糎）である。

本書は上下巻にそれぞれ奥書識語があり、嘉慶二年（一三八八）に頼尊と其阿弥陀仏によって記された縁起が、慶長四年（一五九九）に隠岐に来島した楽運社信譽によって書写され、元和元年（一六一五）に奉納されたものであることが知られる（表紙に信譽識語があることから、信譽本と呼称するのが適当かと思われる）。下巻の奥書には、本文のうち「神祇帳」の部分が信譽の直筆であることが明記されているが、調査により、本文を複数の人に書写させながら、その部分は自筆であることが確認できた。また、頭注や裏書があることも判明した。頭注は、いつの時点にか料紙を切りそろえたことよって一部を欠いている。これら頭注や裏書の存在は『隠岐』に報告はなく省略されたようである。しかし、裏書には縁起の内容に深く関わる注や、信譽が縁起を書写するに至る経緯などの重要な情報が含まれており、本縁起の研究には必須の資料といえよう。

三、『高田大神縁起』と楽運社信譽

『高田大神縁起』の機能や歴史的な意義は、高田明神の祭祀との関わりの中で問われなければならない。二種の縁起のうち、丹表紙本の奥書識語にはそうした問題を考える上での重要な情報が含まれている。そこで、本稿では丹表紙本を中心に取り上げてみたい。

丹表紙本は、慶長四年に楽運社信譽によって書写され、その後奉納された縁起である。信譽という人物は、戦国時代から江戸時代にかけて、時代の変革期に活躍した三河松平家出身の僧侶、楽運社信譽秀翁恵伝（一五六〇～一六三五）である。徳川家と深い関わりを持った浄土宗の僧侶であり、高田明神の祭祀のみならず、都万ひいては隠岐島の歴史研究の上でも注目すべき人物である。松平太郎左衛門家七代親長の三男として生まれ、十一歳のときに徳川家の菩提寺である大樹寺成誉慶円のもとで出家し、川越（埼玉）蓮馨寺感誉存貞に入門、続いて増上寺観智国師に師事し、顯密の諸宗のみならず神道も究め、伊勢や熊野へも赴いている。紀伊（和歌山県）小倉光恩寺を建立して以後、大和、出雲、隠岐など諸国をめぐり、寺

〔図版②〕 丹表紙本下巻奥書部分



四、神殿に祀られた縁起

丹表紙本の奥書識語は、嘉慶二年の本奥書と、信譽の書写に基づく奥書があり、縁起の成立と祭祀のありかたを南北朝時代と江戸時代という二つの時点から多角的に探ることができる。さらに、裏書に奥書識語と関わる重要な情報が記されていることから、両者はあわせて検討する必要がある。そこで、奥書と裏書の本文を相互に掲げて重ねながら、祭祀における縁起の機能を見て行きたい。

はじめに、本奥書から、南北朝時代における縁起の成立とその祭祀について見ることにしたい（以下に掲げる奥書と裏書の本文は返点等を含めすべて丹表紙本に基づいて翻刻し、私に句読点を施した）。

① 奥書云。右此縁起者、雖「ニ浅智短才ノ極ナリト、任ニ御託ノ趣ニ、法印頼尊并沙弥其阿弥陀仏記レ之、奉レ納ニ御殿一者也。嘉慶二年丁卯二月三日 頼尊

院の建立や復興に尽力し民衆の勸化に努めた。その業績は、『紀小倉光恩寺開祖信譽上人伝』⁽⁴⁾（以下、『信譽上人伝』と略す）に詳述されている。

信譽の活動において、高田明神の縁起の書写と関わって注目されることは、神道に対する造詣の深さである。『信譽上人伝』には光恩寺に田中祠の夢告によって感得された神書二巻が伝えられていたとの記述もある。信譽は、『高田大明神縁起』に内包された神仏の世界観を享受し、明神と交信することのできる、きわめて中世的な浄土僧であったと言える。『信譽上人伝』には、信譽が高田神社に詣で、託宣を蒙ったことも記されている。そこには、「隠州に至り、州の俗多く神明を崇む。誦経持咒の者を見れば、道の蠹とおもへり。これを憂ひ、高田明神に祈ること七日、神告げて曰く。本迹異なると雖も、不思議にして一なり（原漢文）」とある。丹表紙本の奥書識語からは、信譽が繰り返し高田明神に勸化のため訪れていたことが知られるのであって、高田明神への参詣は信譽の思想や宗教活動の上でも深い意義があったと推察される。高田明神は、南北朝時代に創祀されてからおよそ二〇〇年後の動乱の世に、はるばる信譽を請じて縁起を奉納せしめ、再びその神威を蘇らせ新たな権威を獲得したといえよう。

判六十一ナ。其阿判八十六ナ

同年九月廿三日ノ御託宣ニ、此兩卷ノ縁起、入ニ箱匣ニ深秘藏、納真殿(マヤ)ニ後、不レ可レ出社内一。但、三年ニ一度、十六所行幸ノ時、祠官七日精進、捧レ之、不レ開、可レ令レ見諸人一。一見ノ功德莫大、必可ニ至仏土ニ。求不レ可レ及ニ披見ニ者也。

依ニ此ノ御神託ニ、御行幸ノ前七日、垢離ヲ取リ、荒蔭ニ臥。錦ヲ以テ裏ミ、垂ニ覆面ニマ、無言シテ持テ、十六所ニ御行也。此ノ箱一見ノ輩、必可レ有ニ御引導一。及ニ度々ニ御託宣、忝御方便乎云云。有時、御託宣、此箱、赤沼カ子孫可レ持レ之云云。

大日變成弥陀尊 末法示現大明神 弘通西方弥陀号 引接結縁衆生界

(高田密嚴亦安養 成沢神仏一池水 蓮華即是法身体 華開見仏弥陀願) 《下巻》

此八句礼文、又、御託宣也云云。

本奥書は上下巻ともほぼ同文を載せる。これにより、丹表紙本の原本にあたる『高田大明神縁起』が、嘉慶二年二月三日に託宣によって千光寺法印頼尊と時衆の其阿弥陀仏の兩人が記し、御殿に奉納されたものとして位置付けられていることがわかる。高田明神の祭祀は、花の乳母および真言と時衆の三者が、それぞれの役割と働きをもってその宗教的な基盤を形づくっていた。ここに、縁起作者として真言と時衆の双方の僧侶が名を連ねることは、それ自体に重い意義がある。信譽が施した下巻本奥書の裏書には、縁起作者のうちとりわけ其阿弥陀仏に関する言及があるので、次に掲げておきたい。

② 私云。一宗ノ雖非ニスト相伝ノ趣ニハ、羊僧信譽、依ニテ明神御夢想ノ告ニ、感得之ニヲ間、秘藏スル迄也。依ニ作者ノ時守(マヤ)真言(トナル)ニ、信行ノ相違少ハ見侍レトモ、後御ランノ人々、其御心得尤候。无始元来往生ナト、候。西山ノ俱時、同時、正覚ニ似者歟。

此内、有能、有頼、熊猷血塗尋云コトアリ。是レハ越中国立山権現御出世由来ト聞及候間、其所ノ人ニ尋、可レ知レ之。

但、彼ノ其阿弥陀仏ト者、尋ニ其本地、鎮西末流ト見タリ。其故云何ナレハ、彼人血脈奉レ納ニ御宝殿ニ。見レハ之レヲ、定患上人ノ御弟子聖円、

良海上人ト云人ニ伝レ法、有ニテ上洛ニ後、帰ニ入ニ四糸金蓮寺ト云ヘル時守門下ニ、其名ヲ号ニ其阿弥陀仏ト。下ニ向隠州ニ事ハ、次郎左衛門広有誘引セラレテ下見タリ。其ノ古ノ名ヲ、血脈ニ良保ト書タリ。上ハ如レ常、源空・弁阿・良忠・良暁・定恵・良海・良保ト書タリ。布薩伝法ト見タリト云。

信譽は、御宝殿（神殿）に納められた其阿弥陀仏の血脈の存在を記している。それは、縁起の相伝とも関わる重要なものではなかったか。

さて、①本奥書は、奉納された縁起がどのように祀られたのかについて詳しく記している。嘉慶二年九月二三日の託宣によって、縁起は箱に入れて神殿に深く秘蔵され、三年に一度の十六所行幸をのぞいては、決して社外へ持ち出してはならないことが定められた。十六所の行幸では、祠官が七日間精進し、箱を開くことなく諸人に見せるのだという。七日間の精進には、行幸前の七日間、垢離を取り荒菰に臥した。縁起箱を奉持するときは、錦で裏み覆面をして、無言のまま十六所へ行幸する。縁起箱の奉持は、託宣によって赤沼の子孫が務めることも定められた。そして、縁起箱を一度見る功德として、これも託宣によって必ず明神が浄土へ引導し往生することができると説かれている。

祭礼において、縁起箱は衆生を浄土へ引導する象徴となりその神威が発せられた。縁起箱を見る功德によって、なぜ往生がかなうのか。それは、①本奥書の最後に掲げられる八句の礼文に象徴された明神の誓願に基づいている。八句の礼文とは、「大日變成弥陀尊 末法示現大明神 弘通西方 弥陀号 引接結縁衆生界 高田密嚴亦安養 成沢神仏一池水 蓮華即是法身体 華開見仏弥陀願」であり、明神の本地仏の徳を讃歎する八句の偈文であった。その意味は、「高田明神は大日如来であり阿弥陀如来でもあって、衆生を救い極楽へ引導する本願をもって現れた神である。高田山は大日の密嚴浄土であると同時に阿弥陀の極楽安養世界であり、神が出現した成沢池とは神仏一体の池水なのである。そこに咲く蓮華の花は、大日の法身の姿であり、蓮華の花が開くとき、そこに仏の姿、弥陀の本願を目的のあたりに見ることができるのだ」という主旨である。この八句の礼文は、真言と時衆がともに一体となって奉斎する明神の本地垂迹の縁起の主題を鮮やかに象っており、ここに縁起が真言と時衆の僧によって記されたということの意義があらためて理解されよう。八句の礼文に象られた高田明神の神仏の体系と出世の本懐が具象化されたテキストが『高田大明神縁起』であった。それなればこそ、祭礼の場で縁起箱は一度拝見するだけでも莫大な功德があるのであり、縁起箱を媒ちして衆生の結縁が叶うのである。

抑も、神殿に秘蔵される『高田大明神縁起』が十六所への神幸の時に奉持されるのは、これも明神の出世の縁起と深く関わる理由からであった。十六所大明神は、中里神社として祀られ現在は高田神社に合祀されている鎮守神である。『高田大明神縁起』によれば、明神が出世の時に宿を借りたのが十六所であった。その謂れは次のようである。

至徳二年の春に石見の方角から賊船が迫ったとき、津途、燈木、都万の三箇所の人民が高田山に防衛のための城郭を築くなどして高田山を踏み汚した。高田山に垂迹し七千年を経て出世の時を待っていた明神は、この時成沢池を出て十六所に宿を借りた。明神は十六所から情勢をうかがい氏子を哀れんで悪風をもって賊船を破却させたが、高田山の梅檀の林を切り払い汚した罪を知らせるために、佐々木広有の後室に憑いて託宣を下した。

この時、明神の口を開かせ出世の縁起を語らせたのが、頼尊であった。その結果、大般若転読と神馬献上が行われ、託宣によって神馬に頼尊が乗って二度三度とまわり、一疋は八幡に、一疋は宿を借りた礼として十六社に献上されたという。かくて、高田山の麓には宝殿が建立され、本地である両部大日の種字が札に書かれ、高田大明神と呼ばれて敬われた。

このように、頼尊の活躍を通して語られる明神の出世の縁起は、十六所への行幸という祭祀の始まりの縁起であった。十六所への神幸に縁起箱が奉持されることは、明神の出世の縁起をあらわす重要な行事だったのである。

こうした神幸祭や遷宮式において、明神の祭祀を掌るのが千光寺であった。一方、時衆の道場は、本尊を阿弥陀として踊り念仏の勤行を行い、法楽をもって明神を奉斎した。時衆道場は、旧都万小学校の校庭跡地（現都万村役場）にあったとされ、近年まで「道場の松」と呼ばれる松が枝を広げていたという。今日、高田神社では二年に一度大祭が執行され、神幸祭ではかつて時衆道場のあった旧都万小学校の校庭跡地に御旅所が設けられ、御神輿が神幸する。その行列には、今なお縁起箱が奉持されている。江戸時代の祭祀記録には、古来よりの式次第として、一番灑水、二番山神、三番幡、四番獅子、五番仏舞、六番御児、七番讚頭、八番笛筒、九番御幣、十番十二合、十一番御水、十二番御縁起、十三番御経箱、十四番御神馬、十五番小神輿、十六番大神輿、十七番神主・祢宜、十八番神子、十九番御供衆と定められていた。このうち十二番目に縁起箱の行幸が確認できる。さらに、天保六年（一八三五）に野津隼人が記した祭祀記録の以下の記述に注目したい。

十二番 御縁起 西里（赤沼藤左衛門）

同（赤沼三郎）

但シ、二年藤左衛門、一年吉三郎。

ここに、縁起箱を奉持する者として赤沼藤左衛門と赤沼吉三郎の二人が注されている。これは①奥書に記された、縁起箱の奉持を赤沼の子孫が務めるといふ託宣の内容と一致する。祭祀記録は「縁起端書」に詳述されていると記す。これが丹表紙本の奥書のことを意味しているのかどうかはわからない。いずれにしても、南北朝時代にはじまった明神と縁起をめぐる祭祀は、江戸時代をへて現代に受け継がれていたことが知られるのであり、祭祀の形はかわっても、託宣をもって記された『高田大明神縁起』の役割と神秘性は絶えず継承され、常には神殿に秘蔵され厚く祀られながら、明神の神輿行幸において奉持されたのである。

五、勸化に用いられた縁起

次に、①本奥書に続けて記される奥書から、戦国の世の終わりから江戸時代の初めにかけて、信譽の活躍した当時の縁起の働きとその祭祀について見ることにしたい。信譽が明神の託宣を被り縁起を書写し奉納した経緯は、上下巻を通じて次のように記されている。

③《上巻》私云。予信譽、雲州富田特留山信樂寺建立功終テ以後、慶長四年秋ノ比ヨリ、渡ニ海隱州ニ、勸ニ化ス国中一ヲ。爰ニ、同国島後都万院ト云在所ニ、名ニ高田大明神一ト、靈驗無双在ニ明神一。其ノ御殿内ニ、不レ明箱在レ之ニ。其書也。同年九月八日ノ夜明レハ、九日ノ曉方ニ、不思議ノ靈夢在レルカ之故ニ、於ニ神前開レ之、拜読ス。時、神主、宜ニ祢マ以下諸人、驚ニ耳目一ヲ、帰ニ入浄土門一ニ。其後、彼箱ヲ申請テ、此両卷ヲ書テ写シ之一ヲ畢ス。弘通ス所ニ、万人一掃、國中貴賤男女、不レ殘悉趣ニ念仏門一者也。慶長四年九月十三日夜、書写シ之。雲州富田信樂寺開基樂蓮社信譽秀翁（花押）
欲スレス写シト時、深秘有レ之レ間、後見ノ人々、可レ有レ心。深可レ敬。就レ中、下卷ハ神道之極致。故、余リ不レ可レ談レ之一禁誡シハ、別紙有レ之一之レ、失念シ不レ写シ者也。

④《下巻》私云。予信譽、雲州富田特留山信樂寺建立之功終後、慶長四年七月比ヨリ、渡海隱州、勸化国中。時、同国内島後都万院云在所、名高田大明神ト、靈驗無双在神。彼御宝殿内、不明箱、此二卷在之。一度納以來、終不開書。羊僧、不思議依靈夢、神主等許之、令見。愚僧信譽、終写シ取之、國中人民勸化之畢。慶長四年九月十三日 樂蓮信譽（花押） 神祇帳所計、羊僧直筆也。

重依靈夢告、高田御宝殿奉納之。元和元年十月日 樂蓮社信譽（花押）

慶長四年に信譽が高田明神に詣でたとき、神殿には二巻の縁起が「不明箱」つまり開かずの箱に納められていた（A）。おそらく、嚴重に封印されていたのであろう。④下巻の奥書（D）には、「一度納めしよりこのかた、終には開かれざる書なり」とも記されている。信譽は、靈夢に導かれ、神主の許可を得て縁起を開き拜読し（B）、彼の箱を申し請けて二巻の縁起を書写した（C）。これが本神社に伝わる丹表紙本である。注目されることは、奥書（CE）に、信譽が書写した縁起をもって隠岐一島の人々を勸化し、念仏門に導いた旨が記されていることである。いったい、信譽はいかなる夢告を被ったのであろうか。その消息が、④下巻奥書の裏書に記されていた。

⑤ 予信誓、靈夢ニ告ニ言ク。慶長四年九月八日、明クレハ九日、白針装束ノ人、宝殿ヨリ出ニ玉ヒテ拝殿ニ、二卷ノ書ヲ持来リ、羊僧ニ告テ言ク。弘ニ通シテ此ノ卷物一ヲ、勸ニ化セヨ一切衆生一ヲ言フ、不レシテ渡又御殿ニ歸リ給フ所ヲ、予、夢ノ心地ニ御袖取付奉リ、可レト給イ我等ニ云ヘ、彼人答テ云ク。可レシテ置ニク宝殿ニ。汝、明日早朝ニ參詣シテ、可レ聞レ之言ヲ、御殿内ニ入給フト見テ、夢ハ覺ニケリ。三度。依之、明旦早詣テ、神主御殿ヨリ取出奉レ読タリト云々。諸人驚耳目。彼ノ国ノ人ニ可尋之。

九月八日の暁、宝殿から白張装束の人が二卷の書を持って拝殿へと出てきて、信誓に、この巻物を弘通して一切衆生を勸化せよと告げて帰ろうとした。そこで、信誓は袖に取りすがって、その巻物を与えよと請うと、宝殿に置いておくべきものと答えたという。

神は、夢告をもって信誓に縁起の所在を告げ、衆生を教化するよう促したのであった。これにより、信誓が縁起を書写した動機が、明神の託宣に基づく衆生の教化であったことがわかる。丹表紙本には信誓によって施されたと思われる頭注や裏書が多くあり、そのなかに勸化に用いるために記されたと思しい言説もあり、頭注や裏書に縁起を通した信誓の唱導の営みを垣間見ることができる。

しかし、縁起は元和元年に託宣によって再び神殿に奉納されることになる。そこに至る経緯を示すような裏書が、上巻の裏書(本文中の裏書)にある。

⑥ 慶長十六年二月十三日、彼岸入、此上巻始。同十九日、日中七日別時回向時、別而夢想告ニヨリ、此書披見沙汰スル故歟。天ヨリ一雲出来、天地頓震動、雷電々光。聴衆消肝計ナリシ間、後日頭露之沙汰、可慎者也。神慮秘藏ニ思召故ヤラント思故、書付也。信誓五十二才。答請人隱岐国住人急念道衛

裏書から、慶長十六年(一六一一)二月の彼岸に、縁起が披講されていた実態が知られる。十九日の日中の別時廻向のとき、天地が震動し雷電が光を放ったことに対し、信誓は、それを縁起を秘せよという神慮のあらわれかと記した。

それから四年後の元和元年(一六一五)十月、信誓は重なる託宣を受けて、明神の宝殿に縁起を奉納する。④下巻の奥書(F)に、それが追記されている。勸化の具として、しかるべき場で読み上げられた縁起は、十六年後に再び宝殿の奥深くに秘藏することとなった。それは、おそらく高田

明神における祭祀の復興という、信譽に託された役目が達成されたことを意味しているのであろう。信譽にとっては、高田明神の祭祀の永続を祈り、明神に代わって自らが念仏門に導いた者たちの安寧を明神に願う行為であったかもしれない。

この後、寛文七年（一六六七）、松江藩士斎藤勘介によって編まれた地誌『隠州視聞合紀』には、明神の縁起について「縁起と称する物二巻あり。鄙俗言ふに足らず」と記されている。これが信譽の奉納した縁起と紺表紙本のいずれをさすものであるかはわからないが、およそ半世紀のちの為政者たちの目には、縁起は鄙俗なものとしてしか映らなかつた。その点からすれば、信譽は、中世的な高田明神の世界観を理解しその神威を振るわせることのできた、最後の宗教者であった。信譽は上巻の奥書識語のなかで、下巻を「神道の極地」と位置付けており、さらに下巻の奥書には、「神祇帳の所ばかり、羊僧の直筆なり」と記している。「神祇帳」とは、良忍上人に鞍馬寺の毘沙門が捧げたという一巻の書、すなわち融通念仏の結縁のために諸神冥衆が名帳に加入したという神名帳のことである。『高田大明神縁起』には、毘沙門講のはじまりにあたって、『融通念仏縁起』が引用されるが、その部分を信譽が自ら筆をとっているということは、これがとりわけ重んじられるものであったことを意味する。信譽が明神との交信を介して受け止めた高田明神の祭祀世界がいかなるものであり、それが縁起にどのように構築されているのかという問題については、こうした信譽の評価を手掛かりとして、今後探求を続けて行きたい。

六、二種の縁起を伝えるということ

以上のように、二種の縁起のうち、丹表紙本について、奥書識語と裏書から祭祀と縁起の関わりを見てきた。そこには、南北朝期の明神の祭祀の始発における縁起の働きと、慶長年間の信譽による復興における働きという、二重に興味深い縁起と神祇祭祀についての実態が見いだされた。明神の祭祀とかかわって、縁起がいかなる役割を担ってきたのか、その営みについてはさらに丁寧に本文を読み解きながら考察する必要があるが、奥書や裏書を通して、その見通しを得ることができた。最後に、丹表紙本に先立って成立したと考えられる紺表紙本について、簡単に述べておきたい。

紺表紙本は、上巻に明神の出現と奉斎、宝殿の建立と遷宮式に関わる霊験や託宣が時系列に沿って記され、下巻には和歌・連歌の法楽文芸の場として栄える明神の由来が、和歌連歌の起りからはじまって、百首和歌・千句連歌の勧進奉納に至る経緯をふくめ、詳しく書き留められている。明神の祭祀は、佐々木氏の息女小花が花の乳母となって高田山成沢池から明神を抱き降ろしたという縁起から語りおこされ、神殿に納められた佐々木氏伝来の宝刀の奉斎で締めくくられることから、紺表紙本は、千光寺や時衆の役割を踏まえながら、花の乳母という祭祀者の立場から記された縁起

であることがわかる。

これに対し、丹表紙本は、花の乳母の祭祀を記しながらも、主として千光寺と時衆の側から縁起が説かれている。ほぼ同時期に、共通の神仏をめぐって、位相の異なる二種の縁起が著されているのは珍しい。二種の縁起は、単なる成立の前後関係によってのみ位置付けるべきものではなく、互いに明神の祭祀をそれぞれの立場から語るものであり、それぞれの機能と役割がある。中世における高田明神の祭祀世界を理解するためには、二種の縁起がそれぞれに語る祭祀世界を丁寧に読み解く必要があるのであって、今日までこの二種の縁起が高田神社に伝えられることには、大きな意味があったのである。

むすびにかえて

高田神社には、社殿の傍に花の乳母の墓とも、小花の乳母の墓ともいわれる古墳がある。近代まで、社殿下にある中里の「屋敷家(佐々木氏)」が、花の乳母の末裔として祭祀を行っていたという^⑦。花の乳母は、伝統的な巫女の家からではなく、地頭佐々木氏の一族のなかから現れた巫女性^⑧の強い女性であった。それが「花の乳母」とよばれたように、女性特有の性役割(ジェンダー)をもって神を育み、豊かな宗教文化を育む母胎となった。新たな宗教的権威の確立において花の乳母が果たした役割は、その点、女性史の観点からも注目される。「高田大明神縁起」は、中世の宗教世界における女性像を考えるためにも格好の手掛かりとなるであろう。

〔注〕

- (1) 頼清の名は丹表紙本では広有と表記する。
- (2) 吉永登・神堀忍「高田大明神縁起について―付・縁起(二種) 翻刻―」、関西大学島根大学共同隠岐調査会編『隠岐』所収、毎日新聞社、一九六八。
- (3) 阿部「巫女と仏教―『高田大明神縁起』における花の乳母をめぐって―』『国文学 解釈と鑑賞』六九巻六号、一〇六―一四頁、二〇〇四。
- (4) 浄土宗全書十七所収。本文は私に訓読した。
- (5) 都万村誌編纂委員会『都万村誌』、一九九〇。

(6) 『祭礼役儀定書(仮称)』(『神道大系』神社編三十六所収) および『高田明神祭礼記録』(『都万村誌』所収)。半田弥一郎「高田神社祭礼記録」(同(統))『隠岐の文化財』一・二号、三九〜四四・三一〜三六頁、一九八三・一九八五。

(7) 野津龍『隠岐島の伝説』、一九七七。

付記

このたび、高田神社野津幸夫宮司の格別の御配慮のもとに、貴重な御縁起の調査についてお許しをいただきました。披見および調査にあたっては総代の嘉本清氏、門脇昭辰氏にも立ち会いをいただきました。深く感謝申し上げます。また、調査では米田真理子氏、橋本美香氏、春田奈穂氏の助力をいただきました。あわせて御礼申し上げます。なお、本稿は平成十六年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部です。

(あべ みか 歴史文化学科非常勤講師)